「環境問題、経済、技術」-4

材料工学環境論

2012/06/20

〇（企業）経営は、マクロな経済活動の一部分（ミクロ経済）であり、部分における生産性向上を目指す活動である。その意味で、経済価値における生産性向上を目指す点は異なるものの、（狭義の）技術と同型である。それゆえ、経営を一種の技術とみなすこともできる。

1．技術経営

1） 経営と技術

・経営は、IOI比向上のため企業が利用可能な経済資源（人、もの、金）を配分する営みということができ、その意味で優れて経済行為である。

・他方、生産性向上の手段という意味で、経営を技術の一つと広く捉えることができる。

・また、狭義の技術の変化に連れ、経営の仕組み＝ビジネスモデル（資源配分＝投資とその回収システム）は変化する。つまり、経営は変化する。

・こうした、経営と技術の関係から、線形計画法に代表される「経営工学」や「技術経営」という「工学」分野が形成されている。技術経営という思想は、三つに大別できる。

①技術としての経営（経営工学を含む）

②企業利益のため、負の側面を含め、技術をよりよく管理し活用する経営（MBAの一部）

③社会、産業、企業におけるイノベーションのための経営

2）技術としての経営

・企業における経済的生産性向上を図る経営は、感覚的にも技術的な色彩が濃い（経営技術という言葉がある）。

・生産性を高める技術として、生身の人間を超える能力を実現する狭義の技術のほか、一人ではできないことを可能にする「組織＝分業による協業」がある。

・経営いかんで、組織の持つ生産性や創造力は大きく左右される。

・その意味で、経営は、組織能力を実現するための技術ということもできる。

・経営から学ぶべきことは、経済人としても社会人としても、人は一人ではほとんど何もできないのを知ること。

3)MBA＝経営学

・すべてのビジネスは、労働サービス、技術（資本）、狭義の経営から成り立っている。

4)イノベーションのための経営

・すべてのイノベーションは、インフラ（プラットフォーム）・イノベーションである。

・環境問題を解決するための技術の選択は、インフラ技術の選択であり、まさに技術経営＝イノベーション・マネジメントの実践的テーマである。

5)技術者と経済、経営

・狭義の技術は、経済活動と経営活動の中でその経済的な価値を絶えず再評価され続けなければならない。

・研究者、技術者には、狭義の技術に対する経営上の利益を最大化するだけでなく、技術の負の側面を抑えながら社会を豊かにし、新技術導入に伴う利害対立や軋轢に対処するなど、利害の調整に積極的にコミットする使命がある。り、

・もちろん、狭義の技術以外の手段でIO比を改善する広義の技術としての「経営」についても工学的な関心を持つことが望まれる。

・さらに、技術を社会的な経済ニーズ（＝現代の「希少財」は何か）ということ、言い換えれば「文明」のニーズに照らして評価し直さなければならない。

２．経済としての経営

1)経営と経済学

・経済学は、その対象とする領域で3種類に分類できる。

①マクロ経済（世界、国レベル）

②ミクロ経済（消費者行動、企業と市場の関係等）

③経営学（企業内経済、ミクロ経済の一部）

・いずれも政策手段や経営手段とその効果の関係を分析し、IO比を極大化するための政策や経営を研究するものである。

2）経営と経済政策

・企業経営は、

①社会的便益の向上、②株主、従業員の利益、③企業の生産性向上を目指す。

・マクロ経済は、①国民生活の豊かさ、②雇用の質的向上、③社会的生産性向上を目指す。

・企業の成功は社会としての成功を必ずしも保証しない。企業とマクロ経済の利害は必ずしも一致しない。経営がもたらす社会的不利益には次のようなものがある。

①市場の失敗（不況の悪循環、地球温暖化）

②外部経済・不経済（公害、環境問題）

③社会問題（不正行為、モバグリ・・・）

・経済政策には、経営の失敗や誤りから社会を救うあめの制度設計が含まれる。

・経営が投資で失敗を犯しても、投資された技術は残る。経済政策には、社会全体を豊かにするための技術の選択に加え、経営の失敗で残された技術の活用も含まれる。

以上